（別紙様式４－１）　　（県立高等学校・中学校用）

（　熊本県立松橋高等　）学校　令和６年度（２０２４年度）学校評価表

１ 学校教育目標

学校教育目標　**生徒の個性を尊重し、伸ばし、一人一人の夢の実現を図る。**

綱領　一　自主積極研学の道に邁進しよう
　　一　気節を尚び、礼儀を重んじよう
　　一　質実剛健を旨とし、勤労を愛しよう

校訓
「自主」「礼節」「勤労」

県教育委員会各課の本年度の教育指導の重点及び取組の方向を踏まえ、本校の「綱領」並びに「校訓」の精神を柱とし、松高スピリッツ（品性を磨き､感性を高め､徳性を養うことで､明るく生き生きとした活力あふれる生徒を育成する。）の具現化に向けた教育を実践する。

２ 本年度の重点目標

１　生徒の健全育成
（１）生徒指導方針の共通理解及び全職員協力体制により、生徒の基本的生活習慣を確立し規律ある生活態度を育成する。
（２）挨拶の励行・整った身なりの指導に取り組み、社会人としてのマナーを育成する。
（３）人権尊重意識の高揚に取り組み、家族を大切にする、友人に優しくするなど他人への思いやりの気持ちを育成する。
２　基礎学力向上の推進
（１）教職員が、生き生きと主体的に学ぶ姿勢を持ち続ける。
（２）自ら課題を見つけ、解決に向けて協働して取り組む探究的な学びを推進し、教科を横断した「学び」への意欲を向上させる。
（３）主体的・対話的に考え抜くことで、深い学びとなる授業を創造する。
（４）様々な教育活動において、「学びの手段」としてのＩＣＴ活用を推進する。
３　進路指導の充実
（１）生徒一人一人の能力・適性等に応じた指導を徹底する。
（２）大学入試・公務員試験・就職試験などに対応できる基礎学力指導に取り組む。
（３）将来の自分の生活設計が見通せるような資料の提供や、教師自らの体験談を日常的に語れるＨＲ活動に取り組む。
４　本校への入学者を増やす取組
（１）学校説明会や地域と連携した活動をさらに充実させ、情報発信（ＨＰ、ＬＩＮＥ、マスコミ等）の工夫に取り組む。
（２）地域の行事やボランティアへの積極的参加により、地域連携を強化する。
（３）松橋高校だからできる各学科の魅力づくりに取り組む。
５　組織的に動く指導体制
（１）松橋高校のためにどうすべきかを考えた学科間の連携強化に取り組む。
（２）危機管理（起こさない取組・起こった後の対応）は、「チーム松高」として組織的に対応し、特に初動対応を重点的に取り組む。

３ 自己評価総括表

評価項目 大項目	評価項目 小項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校経営	教育方針に基づいた学校教育目標の達成及び	学校活性化のための特色ある教育活動の展開	教育活動の特色化及び情報発信による入学者の増加	①ＫＳＨ構想のもと地域や同窓会と連携した企画を実施する ②毎月全職員で中学校を訪問し、学校通信等を配布する。ＳＮＳ	Ｂ	①体験入学では同窓会有志の協力を得てマルシェを開催、昨年より２０名以上参加者が増えた ②今年度は学校通信を８回発行し、近隣の小中学校

	業務改善の推進			により学校行事等を情報発信する		４７校に手渡しで配布した ③インスタグラムの投稿数を昨年度１０９回から今年度１７０回（1/15現在）に増やし、情報を発信した
		目指す生徒像、学校像の実現	①生徒が主体的に学び、考え抜く教育活動の展開 ②学校教育目標の具現化による地域から信頼される学校づくり	①生徒の興味・関心を引き出し、課題を見つけ解決に取組む探究的な学びを推進する ②地域に愛着や誇りを抱く教育活動や学校行事に外部参加を増やす活動を展開する	B	①生徒は学科ごとに課題研究に取組み、中間発表会と最終発表会を実施し、探究的な学びを推進した ②全学科で役割を分担し、道の駅弁プロジェクトに取組んだ。食の専門家との協働や地域の方々との触れ合いを通して地域貢献の喜びを体感した
	学び合い高め合い支え合う職員集団づくり及び働き方改革教師の指導力向上	持続可能な教育活動を目指した業務改善及び時間外勤務の削減	①コミュニケーションを大切にした風通しのよい職場づくり ②ＩＣＴを活用した業務の効率化 ③職員のストレス軽減による心身の健康増進	①情報共有の場を設け、説明や指示を丁寧に行う ②連絡掲示板サイトの作成により、業務の効率化を図る ③年休取得の促進やノー残業デーの実施により、働き方改革を推進する	B	①関係部署の縦横の連携を強化し、大事な情報を共有することで業務の円滑化が図られた ②職員朝会や会議の時間短縮、データ等、情報の一元化によって業務が効率化した ③夏季特休の完全取得をはじめ休暇取得の促進、業務の効率化に取組み、時間外勤務が昨年度より約２時間短縮された
		教師としての使命感や資質の向上	職員の自己研鑽による指導力の向上	校内職員研修の計画的な実施や校外研修、視察へ積極的に参加する	B	新たな研修制度により自己研修が推進された。校外研修の復講は十分ではなかった
学力向上	教師の指導力向上	「分かる」授業の工夫と確立	主体的・対話的な授業を展開し、生徒の深い学びにつなげる	①お互いの授業の工夫を学び合う機会を積極的に設ける ②シラバスを活用し、見通しを持った学習を支援するとともに教科横断的な指導について検討する	B	①研究授業週間を設定、共通テーマを設けるなど相互授業見学を促した ②研究授業であっても見学者数は多くなかった。職員が意識をもって参加する方法を検討する
		観点別評価の推進	指導と評価を効果的に機能させる（評価と指導の一体化）。	①評価に関する校内研修を実施する ②評価の時期や評価基準、妥当性について職員間で協議する時間を確保する	A	①年度当初に観点別評価に係る校内研修を実施し、教科間で評価の付け方や課題について協議する時間を設けた。観点別評価の計算シートを作成し、教科主任会を通じて職員に提示した ②学期評価のための短縮授業期間を設け、教科内で評価について検討する時間の確保を行った。
	基礎学力の定着と学習習慣の確立	自宅学習の確立と定着	生徒自身が課題と向き合い、目標に向けて取組む	①スタディサプリを用いた課題の配信を行う ②自宅で課題や個別の学習ができるよう学習用端末の持ち帰りを進める	B	①課題配信だけでは学習習慣の定着は難しいことを踏まえ、来年度は学習機会の確保という視点からスタディサプリの利用を検討していく ②学習端末の持ち帰りの

						基本ルールを設定、必要に応じて担任管理のもと持ち帰りができるようにした
キャリア教育　進路指導	進路意識の高揚	３年間を見通したキャリア教育の推進	①卒業後の進路選択によって自分がどう生きていくかを考えさせる ②社会で生きていくために必要なマナーや自分の考えを伝える力、話を聞き理解する力を習得させる	進路だより（羅針盤）の発行やタイムリーな情報を提供し、意識啓発に努める 【１年次】 進路講演会やガイダンスを通じて仕事や学問について学習し、適性検査等を活用、自己を知り、進路選択を行う上での材料を見つける出前授業を通し、自分が知らない進路について知ることで進路選択の幅を広げる 【２年次】 進路目標の確立を目標にライフプランニング授業による将来の生き方を考えさせ、学校説明会やオープンキャンパスへの参加を促し、進路ガイダンス等を実施し、目標を明確にする。１、２年次にインターンシップへの参加を促し、生徒自身が体験したい実習先にアポイントを取り、事前の打ち合わせから実習まで自主的に取組むことで主体性を育む。教師は、マナー研修や事前事後の取組み等を支援する。出前授業を通して自分が知らない進路について知ることで進路選択の幅を広げる。 【３年次】 卒業生を囲む会や企業懇談会等で、より詳細な将来の生き方を選択できるように促し、進路実現を目指す	B	情報発信については、十分ではなかった。次年度は、計画的に情報提供を行う 【１年次】 １１月進路講話、１２月職業体験フェスタ、２月くまもと産業復興エキスポに参加。進路選択につながる経験を積むことができた。出前授業「職業を知ろう」が諸事情により実施できなかった。時期や方法を検討し、次年度は実施する 【２年次】 ライフプランニング授業は実施方法で主催者と学年の調整がつかず実施に至らず。１２月進路講話、職業体験フェスタ、１月から就職希望者にキャリアサポーター面談を実施。インターンシップ参加者は１・２年全体で増加した。事前学習から企業研究やマナー学習など積極的に活動した。受入企業の評価も総じて肯定的なものが多かった。一方、希望制にした３年間インターンシップに参加する生徒は増えなかった。次年度は学年の意向もあり、２年生全員対象に実施する予定。 【３年次】 １学期のキャリアサポーター面談と卒業生を囲む会等で進路意識を高められた。就職では不採用がいなかった。内定者セミナーでは、高校と社会人の橋渡しを行った。
	進路目標の達成	進学や就職に向けた早期段階からの取組	①２年生の３学期までに進学か就職かを概ね決定させる ②３年生の進路実現	①２年２学期までの様々な進路の取組みで進路目標を確立し、２年３学期に就職希望者（就職ガイダンス）、進学希望者（小論文ガイダンス）に目的を持って参加させる。合同企業説明会で企業の話を直接聞き、具	A	①２年生は３学期の進路行事や進路指導部面談を通して、次年度に良いスタートが切れるように取組んでいる ②３年生の就職希望者は全員内定。進学希望者も私大の一般入試を受験する者を除いて合格した。総合型選抜、学校推薦型選抜に

				体的な企業、業種、職種および進学先を絞り込む一助とする②３年生では、それぞれの試験に向け、具体的な取組みを実践し、進路実現につなげる		向けて面接対策、小論文対策、個別添削など進路実現に向けて適切にサポートできた
生徒指導	松高マナーの涵養	正しい制服の着用、元気で明るい挨拶、正しい言葉遣いができる	校内外を問わず正しく制服を着用し、明るい挨拶ができる	・定期的に服装指導を行い、身だしなみの意識の涵養に図る ・朝から正門で挨拶運動を行う ・学校生活全般において、即座に指導する	B	①定期的に服装指導を実施することができた ②生徒に応じて慎重に指導を行うケースが多かった
	交通指導の充実	毎月の交通安全呼びかけの運動	①交通安全の日を活かしながら、交通委員が全校生徒に対し、交通安全の呼びかけを行う ②ながらスマホ根絶等、マナー向上を訴え外部からの苦情をなくす	①交通安全の日（毎月１０日）に教師と交通委員で啓発活動を行う ②自転車・原付通学生は、交通ルール、天候や道路状況、車両の特性を理解し、運転するように適宜指導する	A	①毎月、交通委員を中心に交通安全の啓発活動を実施した ②交通に関わる地域からの苦情はなかった
		二重ロックの徹底	全校生徒への呼びかけ運動を継続し、２重ロックの施錠率を毎月８０％以上にする	毎月の交通安全の日に点検を行い、啓発活動に努める。点検しない日の施錠率を上げる呼び掛けをする	B	年度初めの自転車点検後、毎月施錠率の調査を行ったが、目標値には届かなかった
	生徒会活動と部活動の活性化	部活動加入の奨励と各種大会やコンクール等への積極的な出場	生徒会を中心に松高フェスタの企画・運営及び校則の見直しに取組む	企画運営のために定期的に話し合う時間を設ける。その際、生徒のみで話し合い、担当職員は助言する形で進める	B	生徒会執行部の話し合いを定期的かつ昨年度より多く実施し、学校行事や校則の見直しに取り組んだ。部活動加入率は上げることができなかった
人権教育の推進	人権意識の涵養と差別意識の解消	教職員の研修の充実と推進体制の機能強化	管理職の指導により、人権教育主任が役割を自覚し、各部・学年と連携を図るとともに、校内外研修の充実を図る	①人権教育推進委員会を中心に、人権学習ＬＨＲや人権行事の内容を吟味し、より良いものを発信する。同和問題の解決を中心に据えた校内研修を実施し、職員の人権意識を高める ②校外研修に積極的に参加し、その成果を復講する。またレポート研修を実施する	A	①人権教育推進委員会を週に１回開くことで、人権行事や人権ＬＨＲの内容を十分に検討することができ、質の充実を図ることができた ②校内研修を４回実施。校外研修は、宇城学校人権集会で本校が発表校となり多数の職員が参加した。校内研修の４回目には、全員レポート研修を実施した
		生徒の人権学習推進	①全教育活動において、人権教育の視点を持ち取組む ②人権教育ＬＨＲ、人権週間における取組みを計画的に行う	①主に人権学習ＬＨＲを通し、身近な人権問題や同和問題などの社会的課題に至るまで学習し、反差別の実践的な態度を養う ②自分とは違った考え方を尊重し、相手を大切にする思いやり	B	①全学年のＬＨＲにおいて１度は同和問題を取り上げることができた ②他の人権問題にも焦点を当て、考察することで、自らの中にある偏見や差別意識に気づき、人権感覚を涵養する試みを行った

				を持つ		
	特別な支援を要する生徒に応じた支援	職員の理解と意識の向上	特別支援教育・高校通級（ＬＳＴ）・インクルーシブ教育システム、学校でのＵＤ化について理解を深め、スキルの向上を目指す	①学びのＵＤ化の重点目標を設定し振り返りの機会を設ける ②研修等の機会にＬＳＴの説明や授業の様子等を説明する。外部からの視察時など、より多くの職員のＬＳＴの授業参観・参加を促進する ③松橋高校での「スタンダード」を作成し、職員間で支援の方法について共有することで理解を深める。また、個別の指導計画をもとに教科担当者会を実施し、各生徒に応じた手立てを共有する	B	①年度当初にＵＤ化教具の使用推進や具体的なＵＤ化の方法を示した。職員に振り返り（自己チェック）をする機会を設けられなかった ②ＬＳＴ担当者から職員朝会要項やメッセンジャーを通して頻繁に授業の様子の報告があった。通級による指導の視察では、複数の職員に参観してもらうことができた。学年によっては学年主任から参加を促す連絡をしてもらったが、参観の頻度には差がある ③年度当初の職員会議で「スタンダード」として本校での特別支援教育や教育相談について詳細を記した。学年ごとに教科担当者会を開き、特別支援教育の巡回相談担当にも参加してもらい、助言を得ることができた
		支援を要する生徒への個に応じた適切な指導の充実	①支援を要する生徒の理解を深め、個に応じた支援を推進する ②生徒、保護者の教育的ニーズを理解し、合理的な配慮を行う ③インクルーシブ教育システムの構築に向けた取組みを行う	①新入生について、第１回生徒理解研修や熊本県が定めるガイドラインに沿って、個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成し、第２回生徒理解研修を行う。第３回生徒理解研修において支援の評価を行う ②週１回、総合支援推進室会議を開催し、生徒の情報共有・支援策の検討を行い、必要に応じて生徒や保護者がスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの支援を受けることができるようにする ③生徒本人や保護者より合理的な配慮についての申し出があった際には、校内で検討し、特別支援教育支援員が学習支援や健康・安全確保等を行う	B	①個別の教育支援計画・個別の指導計画については、熊本県が定めるガイドラインに沿った形で作成し、研修を行うことができた。特別支援教育コーディネーターが三者面談等に同席し、合理的な配慮についての説明や支援策の提案等ができた。教科担当者を交えて個別の指導計画を作成することで、担任・副担任だけでなく、各教科担当者にも生徒の状況を知ってもらうことができた。個別の指導計画をもとに、教科担当者会を開いた。職員の協力のもとスムーズに実施でき、支援を必要とする生徒の観察や手立てが共有できた ②総合支援推進室会議を週１回開催し、生徒の支援策検討や専門家へ繋ぐことができた。学年、クラス担任、他部署（生徒指導部や教務部等）との連携を行うことができた。生徒支援推進委員会・特別支援推進委員会では、ＬＳＴの受講に関する制度、評価等を主に議論し、今後に向けた改善点を見つけることがで

						きた。日々変化する生徒情報の共有は、メッセンジャー等を利用して細やかに実施した。必要時にはＳＣ、ＳＳＷの協力を得ながら、専門機関や医療機関との連携を行った ③特別支援教育支援員が配置され、教室移動の支援や昼休み中の見守りを含め、きめ細かな支援ができた。状況に応じて、特別支援教育支援員の配置を変更し、対応した。生徒の支援の一つとして、教室復帰を前提とした別室利用について校内のガイドラインを作成し、課題も見えてきた。今後の活用に向け、課題と方策を検討していく必要がある。
	命を大切にする心を育む指導	自他の生命を尊重する心の育成	①心のきずなを深める月間の取組みを行う ②ストレス対処教育を全学年で行う	①月間の周知と涵養、通信を発行する。心のきずなを深めるための標語を作る。心のきずなを深める詩や書籍を紹介する ②１年「私の四面鏡」「二者択一」２年「さわやかな自己主張」「月からの脱出」３年「アンガーマネジメント」を実施する	B	①心のきずなを深める月間に実施の呼びかけ、通信の掲示、詩の紹介、標語作成（人権推進委員会と連携）を企画し、月間の周知を図った。 ②ストレス対処教育では、より本校生に合うように教材を改良した。ＳＣに資料提供や動画作成に協力してもらうことでＳＣの活用ができた
いじめの防止等	いじめの未然防止	生徒・職員・保護者のいじめ防止に対する意識の向上	①集会や講演会、研修会を積極的に行い、いじめ「ゼロ」を目指す ②校内のいじめ根絶に向けた体制の充実を図り、学校内の言語環境を整える	①集会や講演会、研修会を行うことで自己肯定感・自己有用感を高め、いじめに負けない集団を作る ②各教科やホームルーム活動において現代社会に起った事件等を考える時間や生徒達と向き合う時間を確保する	B	①校内のいじめ根絶に向け、支援や人権教育との協力体制を図ることができた ②いじめに特化した集会や講演会を実施することができなかった
	いじめの早期発見	いじめ早期発見に向けた取組の充実	①心のアンケートなどを活用し、いじめの早期発見に努める ②いじめに関する通報（スクールサイン）及び相談機関を生徒、保護者に周知徹底する	①定期的なアンケートの実施と情報を分析し、職員間で共有を図り、早期発見・早期解決に努める ②日頃からスクールカウンセラー等の外部機関とも連携をとり、初動対応を迅速に行う	A	①アンケートの結果をもとに会議を開き、状況の把握と対応策の検討を行い、早期解決に努めた。 ②ＳＣやＳＳＷ等、外部機関と連携を図ることで、医療機関にも迅速に繋ぐことができた
地域連携	地域活動への参加	地域ボランティア活動への参加	宇城市や各地区の実行委員会と連携を図り、生徒へ情報を発信する	各実行委員会等と連携を図り、企画やボランティア活動へ積極的に参加する	B	「高校生道の駅弁」の商品開発について「県立高校学びの祭典」で発表した。地域の行事「宇城市文化祭」や松橋西支援学校での運

コミュニティ・スクールなど						動会ボランティアなどに参加した
		地域貢献活動への参加	各市町村や地域の方々と連携を図り、生徒へ情報を発信する	宇城市役所、宇城商工会等と連携し街なか図書館との交流を図る	B	宇城市役所や地域企業の協力により「道の駅弁」や「フードコート」の探究活動を活性化することができた
	保護者・同窓会との連携 学校運営協議会の推進	ＰＴＡ・同窓会行事への参加・協力	喫緊の課題である定員割れの解消に向け、ＰＴＡ・同窓会と協力し、広報活動や小中学校訪問を行い、入学者増を目指す	学校案内パンフレットを中学生にとって魅力的な内容に改定したり、学校紹介チラシを定期的に作成したりして各小中学校等に配付し、学校の取組みを周知する	B	学校案内パンフレットをわかりやすい内容に改訂した。学校紹介チラシを作成し、小中学校に担当職員が配付した。松高フェスタでは、ＰＴＡがキッチンカーを呼び、好評だった。
	学校運営協議会の推進	学校運営協議会の開催	学校運営協議会を開催、地域と一体となった特色ある学校を目指す	学校運営協議会委員から意見を聞き、特色ある学校づくりにつなげる	B	委員から御意見をいただき、職員間で共有し、学校運営に反映させた

４　学校関係者評価

【学校経営】
・体験入学におけるマルシェの導入、学校通信を小中学校に配布、インスタグラムによる情報発信等、積極的な取組みは高く評価できる。入学者増に結び付くことを期待する。
・社会変化のスピードが速くなる中、教育がどうあるべきか考えさせられる。少子化が止められず学校運営も変化していかなければならない。
【学力向上】
・研究授業における職員の授業参観が多くなかったということであるが、実施方法等、改善の余地があれば目標達成に向けて検討をお願いしたい。
・学力差が広がっている中、様々な方法で学力向上に努力をされている。
・学習習慣が十分に備わっていない生徒がいる中で、生徒や保護者の評価が高く、教職員の努力が報われていると思う。
【キャリア教育（進路指導）】
・学校運営協議会の中で進路状況を詳しく報告してほしい。
・情報発信については、十分ではなかったという評価であるが、学校評価アンケートでは生徒・保護者ともＡ評価となっている。学校側としては、もっと知らせたいことがあるということであろう。さらなる充実を期待する。
・評価表の結果から入学３年間を通したキャリア教育の成果が上がっている。
【生徒指導】
・明るく元気の良い挨拶によって、地域の評価がより高まるのではないか。
・服装や交通ルールは、よく守られていると思う。
・松橋高校敷地内や学校周辺で生徒の姿を目にすることがあるが、服装の乱れやマナーの悪さを感じたことはない。丁寧に指導を行っておられると実感している。
・生徒数が少なくなるとチームで行う部活動の活気が低下する。コミュニケーション能力や喜び、反省、忍耐力を経験する場を作ってほしい。
【人権教育】
・特別な支援を必要とする生徒に対しても丁寧に対応しておられることが分かった。本校でお手伝いできることがあれば協力したい。
・外国の方と共に暮らす時代である。いろいろな方面から見たり聞いたりできる力を養い、相手をまず褒める習慣を身に着けてほしい。
【いじめの防止】
・いじめに特化した集会や講演会を実施することができなかったとのことだが、日常の授業を含む学校生活を通して生徒の様子を観察し、必要に応じて適切に対応されていると思う。これからもいじめのない学校づくりに学校全体として取り組んでいただきたい。
・松橋高校に入学して良かったというアンケート結果は、教職員のやりがいにつながる。少人数校の良さが生かされ、いじめの早期発見、早期解決に結びついている。
【地域連携（コミュニティ・スクール）】
・松橋西支援学校高等部の学校行事に多数の生徒がボランティアとして参加し、とても積極的に活動して

いた。
・ボランティアは、学校が情報を提供し、個人の判断で参加すればよいと思う。
・同窓会報で学校の様子や学科の特色を紹介している。同窓会として積極的に協力したい。
・生徒の評価は低いが、宇城彩館や宇城文化祭等に参加することで、社会とのつながりを経験していると思う。
【その他】
・インスタグラムの発信等、内容や発信の方法がよく工夫されている。
・新入生に松橋高校を選んだ理由やどんな学校にしたいのか等、アンケート調査を継続して実施し、学校を良くするアイデアを募ってほしい。
・学校評価アンケート結果で、スタディサプリの活用、ボランティア・地域貢献活動の参加について、職員、生徒、保護者の評価に開きがあるので分析が必要である。
・アンケートの保護者回答率が低く、課題であると感じる。
・アンケートは、年２回実施できれば、前期に課題掌握と分析、後期に改善と成果を検証でき、数値の変動による実態把握がなされ、次年度につなぐことができる。
・松橋高校内に松橋西支援学校高等部が移転し、２年が経つ。今後ますます交流が進み、お互いの生徒がより良い成長につながることを期待する。
・アンケートの保護者評価が高いことを評価したい。教職員の取組や必死さを感じる。一人一人の生徒と向き合えている結果であり、このことをいかにアピールしていくかが大事である。少子化の時代に向け、多様性を考慮し、学力、生活、生きる力、稼ぐ力を身に着け、たくましい人に育てていくことが重要である。

５　総合評価

学校評価表作成の参考とするために学校評価アンケート（職員・生徒・保護者）を実施した。アンケートは、１～４段階評価で平均３．０以上をＡ、２．５以上～３．０未満をＢ、２．０以上～２．５未満をＣとした。生徒の自己評価では、ボランティア活動や地域貢献活動への参加がＣ評価と低かったが、全項目の平均値は３．２で、概ね良好な結果となった。この結果を踏まえ、各部署で協議し、学校評価表の評価及び成果と課題を作成した。評価については、ＡとＢのみで概ね目標を達成できたと考える。特にＡ評価である「観点別評価の推進」「交通安全運動」「進路に向けた早期段階の取組」「人権教育研修の充実」「いじめの早期発見に向けた取組」については、計画的な取組やきめ細かい対応の成果であると捉えている。この学校評価表を全体で共有し、各部署で年度末反省と次年度に向けた具体的な取組について協議を行い、ＰＤＣＡサイクルの実践に取組んでいる。

６　次年度への課題・改善方策

・次年度も引き続き、熊本スーパーハイスクール構想（ＫＳＨ）のクリエイトハイスクール指定校として、３学科（普通科、家政科、情報処理科）協働で、地元の多様な食材を生かしたアイデアの開発・販売・分析等、学科横断型の探究的な学びを通した魅力ある学校づくりに取組む。
・魅力の発信について、担当部署を改編し、学校ＨＰ、学校通信、インスタグラムを情報発信の柱としてより充実させるとともに、体験入学が地域の方々の交流の場となる企画を実現させ、参加者を増やす。
・ボランティア活動や地域貢献活動に積極的に参加できるように、部活動やクラス単位の参加を促したり、講演会を実施したりして、生徒の意識改革に取組む。